七社神社沿革（要約）

文責 七社神社総代長　滝田秀夫

樋春は、元来は樋口村と称する一村であったが、万治３年(1660年)に分村して樋口（ひのくち）村と春野原（しゅんのはら）村の二村になった。この二村は、明治５年(1872 年)に再度合併して樋春（ひはる）村となり、これが現在の大字に引き継がれている。樋春は、行政上は樋春北・樋春南の二区に分かれており、樋春北はかつての樋口村、樋春南はかつての春野原村にあたる。

社号額（扁額）

『風土記稿』樋口村の項を見ると、村内の社寺として七社明神社・通殿稲荷社・観音寺・地蔵堂が挙げられている。このうち、**七社明神社**（しちしゃみょうじんしゃ）は、現在の七社神社のことで、樋春北・南が共同で祀る鎮守の社である。一方、**『風土記稿』春野原村の項を見ると**村内の社寺として、春日社・稲荷社・通殿社・真光寺・薬師堂の五つが挙げられている。**これらのうち、春日社は、樋口村の七社明神社を指すものである。**樋口村と春野原村とは、別々の村でありながら、両方で同じ神社を祀り、両村は社寺の信仰の上ではかなり深いつながりを持ち続けてきたことがうかがわれる。このように、七社神社は樋春北に鎮座するが、樋口村と春野原村が、万治３年に分村する前から両村で鎮守として一緒に祀ってきた神社であり、現在も樋春北と樋春南で一緒に祀っている。**七社神社の「七社」とは、**文字通り、七つの神社すなわち、平安時代から室町時代にかけて朝廷の信仰が厚かった**伊勢・石清水八幡・賀茂・松尾・平野・稲荷・春日の七社の祭神を祀る社の意である。**同じ神社を指して一方では、「七社明神社」といい、他方では「春日社」という理由は不明であるが、七社神社の祭神七柱のなかには春日社の祭神である天児屋根命（あめのこやねのみこと）も含まれていることと関係があるように思われる。御神体は幣束で、拝殿の中には、伊勢参宮絵馬額（明治３５年）や榛名山太々講中額（明治２５年）などの奉納された絵馬・額がいくつか掛けられている。

本殿は、永禄年間(1558~1569年)の造営と伝えられている。天保１０年(1839年)には、屋根の茸替えも行っている。

拝殿も、一間社流造りで、天保１０年の造営と伝えられ、同年に併せて神祇伯資敬王から社号額の「七社大明神」の額字を受けている。（右上の写真）

しかし、現在の鳥居（文久２年(1862年)両村総氏子建立）の社号額には、「七社大神」の額字がある。樋春の七社神社といえば、すぐに団子投げが連想されるほど（明治１９年から平成２４年までの１２７年間実施）春・秋のお日待ちの団子投げは、永く、広く近在に知られていた

（平成２０年４月６日　埼玉新聞）

伝統祭事　拾って自宅に

団子投げ

無病息災

氏子から集めた米で作った団子を投げ、一年の健康や豊作を願う伝統行事「団子投げ」が六日、熊谷市樋春の七社（しちしゃ）神社であった。樋春地区に古くから伝わる慣わしで、神社の春の祭事「お日待ち」に合わせて行われた。（冨田かおり）

団子は、樋春地区の百五十九戸の氏子が各家庭から持ち寄った米で作る。その量九十㌔。それをひいて米粉にし、直径約四㌢の団子を作る。

境内は、子どもからお年寄りまで、団子投げを待ち構えた氏子たちでいっぱい。神前に供えて祝詞（のりと）をあげた後、拝殿の東西に設けた縁側に総代四人が上がり、盤台に山積みにした団子を一斉に投げた。

「団子は神さまへの供物。食べると無病息災であると伝えられる」と話す小柴捷子宮司。氏子ははにきやかに団子を拾って袋に入れ、大事そうに抱えて持ち帰った。

総代長の持田昭治さん（８８）は「今ではあまり見られなくなった団子投げの行事も、氏子たちの協力で受け継がれています」と笑顔。これからの農繁期に向けて五穀豊穣を願う意味も込められているという。

桜吹雪が舞う中、勢いを上げて団子を拾う氏子たち＝熊谷市樋春の七社神社

熊谷・七社神社

語句注釈　●一間社流造り＝切妻造りの前流れの屋根が、線形に長くのび、向拝になった神社建築で桁行が１間のものをいう。　●神祇伯（じんぎはく）＝神祇官の長官　●明神＝（みょうじん）＝神格の一種。鎮座の年代が古く、由緒正しく霊験のある神社。●大神（おおがみ）＝霊験灼かな神への敬称

右上の写真　社号額裏面には　天保十年七月　神祇伯資敬王謹書　刻印　とあります。

補足　境内に合祀された**通殿稲荷社**（つうどのいなりしゃ）とは？（注釈　今でいう通称『ツードン』）

樋春北には、通殿様と呼ばれる真光寺持ちの堂があった。これは、『風土記稿』樋口村の項に見える「通殿稲荷社」のことである。明治四二年（１９０９年）に字四度梅原（しどめはら）から七社神社に合祀された「稲荷社」とは、この通殿稲荷社のことである。（この時字宮裏の稲荷社も併せて合祀）。現在は、拝殿の東側に**①稲荷社**の祠が祀られている。通殿稲荷社も荒廃が激しく、平成に入り残った社殿も取り壊されている。通殿稲荷社で特に祭りがあったという話は聞かれないが、養蚕が盛んであったころは、堂内の「オシラサマ」を蚕の神様として信仰する人があり、真光寺では護符なども頒布していたようである。境内に合祀された後、初午祭ではお日待と同様、南北合同で団子投げを行っていた。初午祭は、七社神社の祭りというよりも、境内にある稲荷社の祭りで五穀豊穣や商売繁盛を祈る。昔は初午祭の祈願は養蚕倍成が中心で、オトカサマ（狐眷属いわゆる白狐）を借りて帰って養蚕場に祀る習慣があった。

境内には、他に鳥居をくぐり左手に**②末社**（坂田稲荷社・持木稲荷社・実朝社）や左手奥に**③御嶽山霊神を祀る築山**、稲荷社の東側には、お手長様を祀る祠（茂木郭 所有）などがある。

神道は外来信仰である仏教や儒教に対し、伊勢神宮を頂点とし『**国の安寧**』と『**五穀豊穣**』を祈る、神話に基づく日本民族固有の伝統的な宗教的考えと日々の実践です。

七社神社の御祭神について少しお話をします。七社神社の「七社」とは、前述のとおり七つの神社すなわち平安時代から室町時代にかけて朝廷の信仰が厚かった伊勢・石清水八幡・賀茂・松尾・平野・稲荷・春日の七社の御祭神を祀る神社の意味です。

本殿は、永禄年間の造営と伝えられています。永禄年間は１５５８年から１５６９年迄で、真に織田信長の天下取りの時代です（１５６０年桶狭間の戦い、１５７５年長篠の合戦、１５７６年安土城築城）。そして、本能寺の変が１５８２年ですから正に織田信長・明智光秀・豊臣秀吉の時代に作られた造営後約４６０年経つ神社です。

拝殿も、一間社流造りで、天保１０年（１８３９年）の造営と伝えられ、同年に併せて神祇伯資敬王から社号額の「七社大明神」の額字を受けています（額字は金箔仕上げの痕跡あり）。いまでもその『扁額（へんがく）』は拝殿の中に大切に保管されています。

七社神社は、このように神祇伯から『大明神』の額字を受けるほど鎮座の年代が古く、由緒正しく霊験のある神社ですのでいまでも多くの神事が行われています。

『七社神社祭事予定表』に記載されたとおり祭事は一年を通じて行われますが、残念なことに団子投げがなくなった平成２４年以降、神事は総代の皆さんだけで行われているのが現状です。

一年を通じての祭事を別の視点で見ますと　**（細かな難しい「決め事」が沢山有ります。）**

① １年間に行われる祭事（祝詞奏上）は⇒　元旦祭から始まり大祓までの年８回です。
② 神前に御神酒・洗米・塩・水・魚・野菜・果物の御供物を供えるのは⇒　年６回です。
③ 神前に団子を供えるのは⇒　初午、春日待、例大祭の年３回です。
④ 神前にお餅を供えるのは⇒　祈年祭と新嘗祭の年２回です。
⑤ 祭事の際、幟旗を揚げるのは⇒　元旦祭、祈年祭、春日待、例大祭、新嘗祭の年５回です
幟旗に書かれている言葉は⇒　**神徳は至誠にして下民を清くす　大和は兵を保んじて萬物を豊かにす**
幟旗大意　神様は、至誠にして、心から常に信仰すれば、村人を清廉潔白にして良い人にする
神様は、大和であれば人を幸せにし、各々その業に就くことができるからすべての物が良くなり豊かになる
⑥ お札（御神札）を氏子に配るのは⇒　塞祭、初午、春日待（榛名神社嵐除）、例大祭の４回です。
⑦ 直会とは⇒　祭事の最後に、神職を始め参加者一同で御神酒や神饌を飲食（共飲共食）することで、祭神との結びつきを強くし加護してもらうという儀式です。
⑧ 拝殿前に神聖地を設けるのは⇒　祈年祭、例大祭、新嘗祭の三大祭。
・・・・・等々 大変です！

幣束台と７祭神の幣束（本殿）

七社神社は七人の御祭神を祭る神社といいました。神社の御神体は幣束（へいそく）です。本殿の扉を開けるとそれぞれの御祭神の幣束が納められています。

七社神社では、一つの幣束台の上に幣束を立てる『位置』（順位）が決められており、定められた位置に各御祭神の幣束を収めることになります。

七社神社の７つの社の御祭神は、幣束台に納められている。上位順で言いますと

① 伊勢神宮の御神体は、
大日孁貴命（オオヒルメノムチ ノ ミコト）　日本中の五穀豊穣、商売繁盛そして開運、安全を祈願　（天照大御神）（あまてらすおおみかみ）
② 石清水八幡の御神体は、
誉田別命（ホムタワケ ノ ミコト）　（誉（いみな）は、応神天皇）　（八幡大神）
③ 春日神社の御神体は、
天児屋根命（アマノコヤネ ノ ミコト）　（真の意味はということ）　（春日大神）
（天照大御神が天の岩戸に隠れたとき祝詞を奏じた神）
④ 稲荷神社の御神体は、
宇迦（倉稲）魂命（ウカノミタマ ノ ミコト）（農業の五穀を守る神）（稲荷神）
⑤ 松尾神社の御神体は、
大山咋命（オオヤマクイ ノ ミコト）　（米・麦・粟・稗（ひえ）・豆）　（酒造りの神）
⑥ 平野神社の御神体は、
大山祇命（オオヤマツミ ノ ミコト）（山を見渡し山を守る神）（山の神）
⑦ 賀茂神社の御神体は、
別雷命（ワケイカヅチ ノ ミコト）　（雷を程々に願って雨を降らす神）

塞祭御神札

塞（ふせぎ）祭の御祭神、久那斗（くなと）神　八衢比古（やちまたひこ）神　八衢比売（やちまたひめ）神の道祖（どうそ）神（じん）三神（禍や悪霊の侵入を防いでくれる神々）は、七社神社に祀られていないため祭事に先立ちこれらの神様を本殿にお呼びする儀式（降神の儀）を行い祭事を始めます。（塞祭の御神札（右上↗）を参照。）

七社神社配置図

田

① 本殿
② 狛犬　伊勢参宮記念
③ 坂田稲荷社・持木稲荷社・実朝社
④ 御嶽山霊神
⑤ 御嶽山喜心霊神
⑥ 手水鉢　伊勢参宮記念
⑦ 灯籠　伊勢参宮記念
⑧ 伊勢両宮・金刀比羅参拝記念碑
⑨ 伊勢両宮・金刀比羅宮・厳島神社参拝記念碑
⑩ 灯籠　伊勢両宮・金刀比羅参拝記念
⑪ 伊勢参宮記念敷石奉納碑
⑫ 灯籠　伊勢参宮記念
⑬ 幟立　伊勢参宮記念

令和元年５月　１日

七社神社氏子　各位

七社神社総代長
滝　田　秀　夫

七社神社の幟旗は令和と同じ万葉の精神『大和の心』です

２４８番目の元号『令和』の御代（１２６代）が始まりました

幟旗（のぼりばた）訓読

神徳は至誠にして下民を清くす（樋春北幟旗）**大和は兵を保んじて萬物を豊かにす**（樋春南幟旗）

幟旗大意

神様は、至誠にして心から常に信仰すれば、村人を清廉潔白にして良い人にする
神様は、大和であれば人を幸せにし、各々その業に就くことができるからすべての物が良くなり豊かになる
※大和（幟旗○部分）＝対立や疎外がなく仲良く協力しあう気持ち

令和に「十七条の憲法」精神

新元号「令和」を考案したと有力視されている国文学者の中西進氏(89)＝写真は、読売新聞のインタビューに応じ、「元号の根幹にあるのは文化目標」とした上で、令和の「和」について「和をもって貴しとせよ」を思い浮かべる」と述べ、十七条憲法の精神が流れているとの考えを語った。

「令和」の出典は、大伴旅人が730年に開いた宴での「梅花の歌三十二首」の序文。万葉集では「初春の令月にして、気淑く風和ぎ」と表記され、「和」は風のやわらかさを示す言葉として使われている。

中西氏は、自ら考案者だとは明言しなかった。しかし、「元号は文化」と考える中西氏は、604年に聖徳太子が制定した

国文学者・中西進氏「和をもって貴しとせよ」

と伝えられる十七条憲法の平和精神を重視。「大和の心」は万葉の精神にも流れ、平和憲法にもつながるものだとした。

その上で「令」は、「美しいことを意味し、「令和」とすることで、新元号にふさわしい「麗しき和」が表現されている」と語った。

ただ、十七条憲法を伝える日本書紀は、全体が漢文で、典拠となる「国書」というのに抵抗がある」とし、日本固有の万葉仮名を使った万葉集こそ典拠の国書にふさわしいとした。

政府は、令和その他の元号案の考案者を明らかにしていないが、関係者の間では、令和の考案者は中西氏だとの見方で一致している。

七社神社　永禄(1558-1569)年間造営
※参考　本能寺の変（1582年）

国文学者　中西 進氏へのインタビュー要旨（2019.4.17読売新聞記事より要旨抜粋）

中西　進氏　1929年生まれ。国文学者。氏の万葉集研究は、「中西万葉学」呼ばれる。2013年文化勲章を受章

質問　新元号の根拠になった「初春の令月にして、気淑く風和らぎ」（新春の好き月　空気は美しく　風はやわらかに）**にある「令」、「和」とは何か？　に答えて**

『和』について

聖徳太子が作った十七条の憲法の第一条「和をもって貴しとせよ」を思い浮かべます。それは１４００年位前にできた平和憲法です。６０４年に制定されるまで、あの当時の日本は、朝鮮半島で泥沼の戦争をしていた。その戦いを停止した時期にできたのが、十七条憲法です。（注釈　明治、大正、昭和ともに外国との悲惨な戦争がありました。平成の御代は「平和」でした。）

『令』について

『令』は「ら行」で始まるのがいい。ら行音が美しいというのは常識です。レイには「麗（うるわ）しい」の「麗」がある。そして「令」に玉編（編では「王」と標記）をつけた「玲」は玉のような美しさを示し、立心偏の「怜」は心の美しさを表す。つまり「令」のつく漢字は内容も響きもいい。その中心にある「令」とは何か。辞書で引くと善いという意味です。そういう善き振る舞いをする人が、令嬢であり令息です。「令」は言葉として美しく、善いものです。

質問　その「和」の精神があって善いから「令和」となるのですね！　に答えて

それを日本語でいうと「麗しい」でしょう。「古事記」が（大和は素晴らしい国どころ）と記した「大和しうるわし」の「うるわし」です。それは和の尊敬されるべき善さ、整頓された美です。**この「大和の心」は万葉の精神にも流れ、日本の文化に脈々と受け継がれ、今の平和憲法にも繋がる。さらに令という麗しき和を築くことです。**

七社神社幟旗

幟旗（のぼりばた）訓読

神徳は至誠にして下民（人々）を清くす

（樋春北幟旗）

大和（仲良く・協力）は兵（人）を保（幸せにして）んじて萬物を豊かにす

（樋春南幟旗）

幟旗大意

神様は、至誠にして、心から常に信仰すれば、村人を清廉潔白にして良い人にする

神様は、大和であれば人を幸せにし、各々その業に就くことができるからすべての物（心も体も物も）が良くなり豊かになる

※大和（だいわ）＝対立や疎外がなく仲良く協力しあう気持ち

樋春北　　樋春南

七社神社の幟旗（バンキ）

訓読　神徳は至誠（シセイ）にして下民（カミヒト）を清（キヨ）くす

大和（ダイワ）は兵（ヒト）を保（ヤス）んじて萬物（バンブツ）を豊（ユタ）かにす

掲揚＝樋春北総代長
（上部に赤の刻印１個）

掲揚＝樋春南総代長
（下部に赤の刻印２個）

2019.2.15　文責滝田

七社神社の塞祭について

2020.1.19　塞祭直会挨拶　滝田　秀夫

塞祭は、御祭神、久那斗神（くなとのかみ）　八衢比古神（やちまたひこのかみ）　八衢比売神（やちまたひめのかみ）の道祖神（どうそじん）三神に禍や悪霊が地区内に侵入しないことをお願いする祭事です。樋春南で2ヶ所、樋春北で4ヶ所に御神札を取り付けた藁竹細工を立て、禍や悪霊が地区内に侵入することを塞せぎます。

総代の皆様へお願い

総代の皆様方には、一年間いろいろお世話になります。以下の今年の祭事予定の内容をご確認のうえ御協力ほど何分宜しくお願い申し上げます。

併せて七社神社の沿革資料をお示しいたしますので是非お読みくださいますようお願い申し上げます。

令和２年　七社神社祭事予定表

令和２年　１月　５日現在

総代・氏子	総　代　氏　名（◎ 神社総代長　○ 神社副総代長）
樋春北 8名(86 軒)	◎馬場 英文(樋春北総代長)　馬場 金正(樋春北副総代長 兼 郭会計) 郭総代:小松原 勝治 馬場　宏 鎌塚 勘一 茂木 雅夫(4／1～茂木 勇司) 馬場　隆 網野 照夫
樋春南 7名(66 軒)	○滝田 正巳(樋春南総代長 兼 神社会計) 髙田 道夫(樋春南副総代長) 前神社総代長 滝田 秀夫 坂田 梅子(本総代・宇会計)　中原 武雄(本総代)　滝田善次郎(前総代)　鎌塚 岩男(前総代)

月　日	祭　事　等	時間	準　備	宮　司	総　代	備　考
R2年1月1日	元 旦 祭	8:30		祝詞奏上	8:20	幟旗8:00～降　1／3　16:00
1月19日 (日)	塞祭	14:30	藁竹細工 北4 南2	祝詞奏上 御神札準備	8:30	社殿清掃　竹6本　藁細工6個 竹細工酒入り6個　御供物
1月26日 (日)	初午(稲荷神社例祭)	14:30	団子準備	祝詞奏上 御神札準備	13:00	社殿清掃　稲荷神社清掃 御供物
2月15日 (土)	祈年祭(三大祭)	10:00	餅 準 備	祝詞奏上	8:30	社殿清掃 幟旗8:00～ (以下幟旗は同じ)　御供物 注連飾り　縄新　竹4本
3月15日 (日)	観音祓(樋春北)	14:00	団子準備	祝詞奏上	樋春北 8:30	樋春北行事　馬頭観音清掃 御供物
4月5日 (日)	春 日 待	14:30	団子準備	祝詞奏上	13:00	社殿清掃 注連飾り 幟旗 13:00～ 榛名神社御神札準備　御供物
4月下旬～ 9月下旬	除草剤散布					担当者(南正副総代長)
	害虫駆除					担当者(北正副総代長)
10月17日 (土)	清掃・樹木剪定作業				8:30	
10月18日 (日)	例大祭(三大祭) 秋 日 待	11:00	団子準備	祝詞奏上 御神札準備	9:00	社殿清掃　幟旗　注連飾り 縄新　竹4本　御供物
11月26日 (木)	新嘗祭(三大祭)	10:00	餅 準 備	祝詞奏上	8:30	社殿清掃　幟旗　注連飾り 縄新　竹4本　御供物
12月上旬	竈注連、神宮大麻 大年神璽頒布		竈注連等 持　参		頒 布 集 金	宮司　社務所に持参
12月22日 (火)	幣束切り	9:00		幣束切り		南北正副総代長 社務所
12月27日 (日)	大 掃 除 注連飾り				8:30	社殿　末社　境内清掃 注連飾り　縄新
12月31日	大　祓	11:30		大祓奏上		南北正副総代長
3年1月1日	元 旦 祭	8:30		祝詞奏上	8:20	幟旗8:00～降　1／3　16:00
1月17日 (日)	塞祭	14:30	藁竹細工 北4 南2	祝詞奏上 御神札準備	8:30	社殿清掃　竹6本　藁細工6個 竹細工酒入り6個　御供物
1月31日 (日)	初午(稲荷神社例祭)	14:30	団子準備	祝詞奏上 御神札準備	13:00	社殿清掃　稲荷神社清掃 御供物
2月15日 (月)	祈年祭(三大祭)	10:00	餅 準 備	祝詞奏上	8:30	社殿清掃 幟旗8:00～　御供物 注連飾り　縄新　竹4本

※主担当祭事及び会計区分

三大祭（祈年祭・例大祭・新嘗祭）（会計＝神社会計）は、樋春南が主担当

三祭事（塞祭・初午・春日待）（会計＝南北郭会計）、観音祓（会計＝北郭会計）は、樋春北が主担当

七社神社例大祭について

祭事のなかで規模の大きな祭事を特に『大祭』と呼び、例祭、祈年祭、新嘗祭がこれに該当します。例祭は正式には、『七社神社例大祭』と呼び、大祭のなかで最も重要な祭祀です。七社神社例大祭では本殿にお祀りしている七祭神に「国の安寧」と「五穀豊穣」を祈願し、併せ秋日待も行います。

Q　七社神社の最高位の御祭神が天照大御神であり、神棚には伊勢神宮の御神札を祀るのはなぜですか？

塞祭の際に配布しました『七社神社沿革』の資料の中で、外来信仰である仏教や儒教に対し神道は、伊勢神宮を頂点とし「**国の安寧**」と「**五穀豊穣**」を祈る『神話に基づく日本民族固有の伝統的な宗教的考えと日々の実践』ですと書いておきました。

七社神社に祀られている御神体、特に天照大御神を最高位にお祀りしていることを御理解いただくためには少々説明が必要ですのでお話しします。

まず、日本人の多くは、仏教と神道の２つの宗教を信じている多信仰の民族です。我々は困ったときについ口にしてしまいます。『助けてください。神様！仏様！』と。

ご承知のように、仏教は５３８年に百済から伝わり、日本中に布教されました。仏教にはいろんな宗派がありますがザックリ言えば、共通するのは、『**死後の極楽浄土**』を祈願する宗教です。

次に『神話に基づく日本民族固有の伝統的な宗教的考えと日々の実線』についてお話しをします。神道は、仏教の伝来より約300年以上前の話になります。昨年5月1日、令和の新天皇が第126代天皇として即位しました。神道では、『その天皇の祖先は、天照大御神を始めとする神々』であるとしています。つまり神様から天皇に変わったことになります。

一方、天皇の在位の期間に係わる標記としての『元号』というものがあります。令和、平成、昭和、大正、明治等がそれに当たります。昨年５月１日から始まった令和は、２４８番目の元号となります。明治以降は、「一世一元号の詔」により、一人の天皇の在位期間に対し一元号とされています。

６４５年に大化の改新が行われ、６４５年から「大化」という元号が日本で初めて用いられ、この時、第３６代孝徳天皇が即位しました。その在位期間は２１年間でした。それ以前の日本の歴史には『元号』は存在しません。

さて、そもそも我々は、天照大御神等の神々がいつから『天皇』になったのかという素朴な疑問に興味を覚えます。

第３５代以前の天皇について、多くは神話や古事記（７１２年編纂）、日本書紀（７２０年編纂）の中で説明はなされています。最初の天皇は、在位が２８０年～２９０年頃の『神武天皇』とされています。

天照大御神は、古事記や日本書紀では神武天皇の５代前の神様とされています。具体的には２３０年から２４０年頃つまり卑弥呼と同じ時代にいた神様ということになります。日本書紀によれば、孝徳天皇が第３６代天皇ですから『大化』という元号が始まる以前の３１０年の間に、多くの神々と３５人の天皇がいたということになります。

伊勢神宮大麻
（伊勢神宮の御神札）

古事記や日本書紀の記述には、つじつまの合わない不合理な部分や疑問な点もあり、多くの学者の間でもその解釈には諸説あります。

いずれにしても**神道では、『天皇の祖先は、天照大御神』であり、その宗教的な考えに基づき、天照大御神を御祭神として祀る伊勢神宮が祀られました。**

さらにその伊勢神宮を頂点とし、天照大御神を御祭神とする神社が平安時代から各地に村の社（やしろ）として日本中に祀られ、天照大御神は名実相伴い日本国全体の『安寧と五穀豊穣』を守る神とされるようになりました。

安土桃山時代の『永禄年間（１５５８～１５６９年）』に創建された七社神社も天照大御神を主祭神として祀っている神社の一つということになります。

Key Word **神惟（かんながら）の道＝神道は、日本人の生活に密着した自然発生的な信仰であり、私たち日本人は古来より神々とともに生きてきているということ！**

七社神社の初午（稲荷神社例祭）について

2020,1,26　初午直会挨拶　滝田　秀夫

今日の初午（稲荷神社例祭）の祭祀は、宇迦魂命（ウカノミタマ ノ ミコト）に五穀豊穣、商売繁盛そして開運、家内安全などを祈願するお祭りです。

Q　神社の祭事は、なぜ『祭』なんですか？

神社で行う祭事は、原則「○○祭」といいますが、これは祭るという動詞が名詞形である『祭』に変化したものです。

『祭る』という動詞には、『神様を神社』に祭る（祀（まつ）る）という意味の他３つの意味があります。まず①神様のお出ましを待つという意味、②神様に御供物を奉（たてまつ）るという意味、そして③神様に従う、つまり服（まつろう）という意味です。

Q　稲荷神社とはどんな神社？　そして「例祭」とはどんな意味なんですか？

神社の名称、『稲荷』ですが、『農業の五穀を守る神・宇迦（倉稲）魂命（ウカノミタマ ノ ミコト）が、稲を荷（に）なう神様』であることから『稲荷』の字が当てられたと言われています。

稲荷神社は、伏見稲荷神社を総本宮とする神社で、五穀豊穣のほか商売繁盛、家内安全、交通安全、芸能上達の神社として全国で３０，０００以上ある日本で最も多い神社です。

『例祭』または『例大祭』とは、その神社の祭事の中で最も重要な祭祀をいいます。

Q　稲荷神社例祭を、なぜ『初午』と呼ぶのですか？

初午という祭事名ですが、稲荷社の総本宮の伏見稲荷神社の御祭神である宇迦魂命が、和銅４年２月１１日、２月の最初の午の日に天から降神され、伊奈利山にお立ちになったという言い伝えから稲荷神社の大祭を初午祭と呼ぶようになったといわれています。全国の稲荷神社は、これに合わせて初午の前後の縁起のいい日に『初午という祭事』を行うようになったといわれています。

Q　宇迦魂命は本殿にも祀られているのに、なぜ今日の祭事は隣の「稲荷社」で行うのですか？

七社神社の「七社」とは、文字通り平安時代から室町時代にかけて朝廷の信仰が厚かった七つの神社、すなわち伊勢・石清水八幡・賀茂・松尾・平野・稲荷・春日の七社の祭神を祀る神社です。稲荷神である**宇迦魂命**（ウカノミタマ　ノ　ミコト）も本殿にその御神体が祀られています。因みに七社神社の本殿には下に示す七つの神社の御祭神の幣束があります。

①**大日孁貴命**（オオヒルメノムチ　ノ　ミコト）（天照大御神）　②**誉田別命**（ホムタワケ　ノ　ミコト）（八幡大神）
③**天児屋根命**（アマノコヤネ　ノ　ミコト）（春日大神）
……▶④稲荷神社の御神体・**宇迦**（倉稲）**魂命**（ウカノミタマ　ノ　ミコト）（農業の五穀を守る神）　（稲荷神）
⑤**大山咋命**（オオヤマクイ　ノ　ミコト）（酒造りの神）　⑥**大山祇命**（オオヤマツミ　ノ　ミコト）（山を見渡し山を守る神）
⑦**別雷命**（ワケイカズチ　ノ　ミコト）（雷を程々に願って雨を降らす神）

実は、七社神社の稲荷社は、「他の場所から移築・合祀された祠という歴史的事情があります。
平成８年に編纂された『江南町史』（P558～564）には次のようなのような記述があります。

> 樋春北には通殿様と呼ばれる真光寺持ちの堂がある。これは、『風土記稿』樋口村の項に見える「通殿稲荷社」のことで、現在はかなり荒廃している。（注釈　平成に入り取り壊し）
> 明治四二年（１９０９年）に字四度梅原から七社神社に御祭神が合祀された「稲荷社」とは、この通殿稲荷社（注釈　今でいう通称『ツードン』）のことである。
> 通殿稲荷社で、特に祭りがあったという話は聞かれないが、養蚕が盛んであったころは、堂内の「オシラサマ」を蚕の神様として信仰する人があり、真光寺では護符なども頒布していたようである。注釈　真光寺は慶長年間（１５９６年～１６１５年）に春原山観音院として開山

> 二月初午日に七社神社で行われる初午祭にも、お日待と同様、南北合同で団子投げを行う。この祭りは、七社神社そのものの祭りというよりも、境内にある稲荷社の祭りで五穀豊穣や家内安全を祈る。昔は、この時の祈願は養蚕倍成が中心で養蚕が盛んであったころは、オトカサマ（注釈　狐眷属いわゆる白狐）を借りて帰り養蚕場に祀る習慣があった。

備考　注釈は筆者加筆

拝殿脇にある通殿稲荷社の祠の御神体も、稲荷神の**宇迦魂命**の御神体です。
そのため御長老に伺ったところ、七社神社に合祀された拝殿脇の稲荷社も、一時期は「マユダマ」を奉納したり南北合同で団子投げが行なれるなど氏子の皆さんにもそれなりに親しまれており、**七社神社の初午ではずっと以前から『御祭神宇迦魂命の祀られている拝殿の扉を開き、拝殿脇の稲荷社の祠（ほこら）で祭祀を行う』ことしているそうです。**

回　覧

令和２年　３月　１日

七社神社氏子
七社神社総代　各位

七社神社総代　滝田　秀夫

四月五日は、七社神社の「春日待」です。

日待は、正月、5月、9月の吉日を選んで、氏子が前の晩から身を清め、総代の家に集まり(お籠もり)、翌朝の日の出を拝み、皆で『豊作を祈願する祭事』に始まります。このお籠もりの際に待つ間、時代の流れの中で氏子が皆で飲食を共にし、歌舞音曲(かぶおんぎょく)などを楽しむようになってきました。

七社神社でも、『祈年祭（としごいのまつり）（2／15）』で、田の神様を山からお迎えしています。昔、何の楽しみも無かった時代、これから忙しい田植えを迎えるつかの間のこの時期に、田の神様と一緒に豊作を祈願するとともに暖かくなった春のひとときを楽しむようになったようです。

江南地区には沢山の神社がありますが、どの神社も盛大に春日待の祭事が行われていました。共通するのは、団子投げでした。そして神社毎に境内を手作りの灯籠で飾り、ささら（鉦（かね）・太鼓（たいこ）・鼓（つずみ）の音に合わせ、獅子舞を奉納する）（上新田、下押切、御正新田、塩、小江川等）や踊りまた能を奉納する神社もあります。帰りには豊作を願うお札を持って帰り、翌日から農作業が始まった訳です。

特に、団子投げですが、時代によっては粟や稗（あわやひえ）を主食にしていた時代は、お米だけの塊の団子は、まさに絶品グルメだったようです。団子投げは、多くの神社で長く行われました。また、日待の祭事は多くの神社で春と秋の２回行っています。

七社神社では、昭和２５、２６年ごろまでは、お日待には、境内を地元の人が絵を描いた灯籠で飾り、余興として素人演芸をやったりのど自慢大会や櫓（やぐら）立てて盆踊り（時期は盆ではないが、内容はいわゆる盆踊りであった）を行っていた。

そのころは露店も何軒か出たので、子供たちは楽しみであった。当時は、どこの家でも親戚を何人も「お客」に呼んだため、お日待の日には人口が普段の五倍や六倍にもなり、団子投げにしても余興にしても、なかなかの人出があった。

（平成８年編纂「江南町史」より抜粋）

※ 祭事後、榛名神社の嵐除けの御神札をお配りします。

１４時３０分より宮司さんによる春日待祝詞奏上が始まりますのでぜひ祭事にも参加してみませんか？

なお、総代の皆さんの集合時間は１３時です。何分宜しくお願いいたします。

榛名神社御神札

七社神社の祈年祭について

2020,2,15　祈年祭直会挨拶　滝田　秀夫

祈年祭は、本殿にお祀りする七祭神に五穀豊穣を祈願するお祭りです。

Q　祈年祭の「年」とはどんな意味ですか？

祈年祭は、『としごいのまつり』とも呼ばれます。これは多くの神社で使われる祭事名ですが、『としごいのまつり』とは祈年祭を『訓読み』した言い方になります。

この祭事は、どんなことを神様にお願いするのかな？　と考える場合、『年』の意味が重要なポイントになります。この『年』という漢字を辞書で調べると、いろいろな意味が書かれています。例えば、①時間を計る単位、②１年は３６５日、③年齢、④高齢等々大きく７つほどありますが、ここでは、しっかり『年とは穀物、特に稲のこと。または穀物の実ること』という意味で使われています。祈年祭は、まさに『神様に五穀豊穣をお願いする祭事』そのものです。

この祈年祭の祭事の歴史は極めて古く、奈良・平安時代まで遡ります。その始まりは神祇官（律令国家で、太政官と並ぶ中央最高官庁で諸国の神社の総轄）で五穀豊穣を祈り行った祭事とされています。８世紀の入り、国の安寧や穀物の豊穣を願う宮中行事としても定着してきました。田植えの始まる前、『田の神様』を山から迎え、収穫の終わった秋に再び山へ送るという農耕儀礼に基づくこの祭事は全国に広まり、現在まで続いています。早春に田の神を迎えるのが祈年祭であり、秋に収穫した穀物を田の神様にお供えし、感謝し共に飲食をした後、田の神様を再び山にお送りするのが新嘗祭の祭事です。従って『祈年祭と新嘗祭はセットの祭事』ということになります。

Q　祈年祭（三大祭）の三大祭とは、どんな意味ですか？

七社神社では、年間８回の祭事が行われます。１月の元旦祭、塞祭、初午　２月の祈年祭　４月の春日待　１０月の例祭（併せ、秋日待）　１１月の新嘗祭　１２月の大祓です。このうち規模の大きな大切な祭事を『大祭』とも呼び、**祈年祭、例祭と新嘗祭**がこれに該当します。この３つのお祭りを**三大祭**といいます。特に他の祭事に対して『祭典』ともいいます。

例大祭は、正式には、『**七社神社例祭**』と呼び、この日に秋日待の祭事も併せ行います。

Q　祭典と祭事では準備するものに違いがあるのですか？

１月からお世話になっています総代の皆さんは今日でもう”４回目の祭事”になります。そして、今年最初の『大祭』です。祭事予定表には、祈年祭（**三大祭**）と書いておきました。

今までの祭事と何か違っている点にお気づきですか？　３点違いがあります。これまでの祭事では、大鳥居・拝殿・本殿・末社・浅間様・稲荷社に紙垂の注連縄を飾り祭事を行いました。紙垂を付けた注連飾りは、『それより内側は、神様のいる神聖な場所（結界）』を意味します。今回もそれは行いました。御供物は・・？　今日の洗米以外の穀物は、お餅でした。七社神社では明治１９年から平成２４年までの１２７年間、春と秋の日待に１年の健康や豊作を願い、団子投げをしていましたから、いまでも春と秋のお日待には、餅ではなく団子をお供えしています。今回の穀物は『糯米（もちごめ）』でしたが基本的にはお米と同じです。それ以外はどうでしょう？

今日は、①拝殿の前に**神聖地（しんせいち）**を作りました　②**本殿も開扉**しました。１粒でも多くのお米がとれますよう神様に直接お願いをしたということです。それは、日本人にとってお米がいかに大切な穀物であるかということです。そして③祭りの標識である**幟旗を掲揚**しました。氏子の皆さんに今日は神社で大切な祭事を行っていますよ、と知らせる意味合いがあります。この幟旗には、各々の神社毎にいろいろな言葉で『氏子の皆さんの神様に対する思い』が込められています。

Q　七社神社の幟旗（のぼりばた）には、どんな言葉が書かれていますか？

それでは、『七社神社の幟旗』（昭和２８年 奉納）にはどんな言葉が ？？？？ 見てみましょう。　**内容は裏面に記載**　ただ、残念（？）なことが２つあります！

神前の祭祀も滞りなく終わりました。これから神饌（しんせん）や御神酒（おみき）のおろし物を参加者が分かち飲食する直会（なおらい）になります。直会は、『より神様に近づき一体となる儀式』とされ祭事次第の一部です。宜しくお願いいたします。

七社神社の新嘗祭について

2020,11,26　新嘗祭直会挨拶　滝田　秀夫

新嘗祭は、神話では天照大御神が初穂(はつほ)を食べたことが始まりといわれ、飛鳥時代からその年に収穫された新米や五穀を神様に御供えし天皇陛下が共に食して収穫に感謝する宮中祭祀として行われきました。その後全国各地の神社でもこの新嘗祭が行われるようになりました。それが本日の七社神社新嘗祭の祭事です！

Q　祈年祭とはどんな関わりがありますか？

祈年祭は、まさに『神様に五穀豊穣をお願いする祭事』そのものです。祈年祭の祭事の歴史は極めて古く、奈良・平安時代まで遡ります。その始まりは神祇官（律令国家で、太政官と並ぶ中央最高官庁で諸国の神社の総轄）で五穀豊穣を祈り行った祭事とされています。８世紀の入り、国の安寧や穀物の豊穣を願う宮中行事としても定着してきました。田植えの始まる前、『田の神様』を山からお迎えし、収穫の終わった秋に再び山へお送りするという農耕儀礼に基づくこの祭事は全国に広まり、現在まで続いています。

早春に田の神をお迎えするのが祈年祭であり、秋に収穫した穀物を田の神様にお供えし、感謝し、共に飲食をした後、田の神様を再び山にお送りするのが新嘗祭の祭事です。従って**『新嘗祭と祈年祭はセットの祭事』**ということになります。

新嘗祭の”新”には、新穀の初穂の意味があり、”嘗”には、ご馳走という意味があることから、新嘗祭の言葉には、**”神様をおもてなしする”**という意味も込められています。

総代の皆様にお願い

年末・年始の七社神社の祭事につきましては、１月に配布いたしました祭事予定表に基づき下記のとおり予定されております。再度予定表のご確認をお願い申し上げます。

総代の皆様方には、年末年始の祭事等で様々なご足労をお掛けすることになりますが何分宜しくお願い申し上げます。

年末・年始の七社神社祭事予定

月　日	神事等	祭事開始時間	総代集合時間	備考
１１月２６日（木）	新嘗祭	１０：００	８：３０	南北総代全員
	樋春南・新旧総代引継会議		１９：００	本・前総代、次期前総代
１２月上旬	伊勢神宮(いせじんぐう)大麻 大年神璽(おおとしのかみのじ) 竈注連(かまじめ) 頒布		頒布及び集金	南・本総代　北・郭総代
１２月２２日（火）	幣束切り	９：００		関係者及び南北正副総代長
１２月２７日（日）	大掃除 注連縄(しめなわ)飾り付け		８：３０	南北総代全員 社殿、末社、境内清掃 注連縄飾り付け
１２月３１日（木）	大祓	１１：３０		南北正副総代長
１月　１日（金）	元旦祭	８：３０	８：２０	南北総代全員 幟旗（8:00～ 1/3　16:00）

回　　覧

令和２年１０月１日

七社神社氏子
七社神社総代　各位

元七社神社総代長　滝田　秀夫

十月十八日は、七社神社の「例大祭」です。

七社神社では、１年を通して１月１日の元旦祭、１月１９日の塞祭（ふせぎさい）、１月２６日の初午祭、２月１５日の祈年祭、４月５日の春のお日待、１０月１８日の例大祭（この日に秋のお日待も併せ行います。）、１１月２６日の新嘗祭、１２月３１日の大祓い等の祭りがあります。（詳細は、令和二年七社神社神事予定表を参照ください。）

そのうち、祈年祭・例大祭・新嘗祭の三つの祭りを「三大祭」と称し、三大祭のうち、最も重要な大祭を例大祭といいます。また三大祭を特に「祭典」、それ以外の祭りを「祭事」とも呼んでいます。１０月１８日（日）は七社神社の例大祭です。

神社豆知識　（榊（さかき）と伊勢神宮（いせじんぐう）大麻（たいま））

（1）神棚には榊を供え、また神前で榊の玉串を添え拝礼を行うのはなぜですか？

（2）七社神社の七祭神のうち最高位の御祭神が天照大御神であり、また神棚に伊勢神宮の御神札を祀るのはなぜですか？

（次頁、「七社神社例大祭について」参照）

榊は、日本で古くから神事に使われた植物であり、『榊』という日本オリジナルの漢字で表します。神事に使う樹木に求められたものは「命の再生」と「永遠」です。芽を出し花を咲かせ実を結び、再び春を迎える。ここに「命の再生」を見る。そして常緑の葉が「永遠」を象徴しています。植物には神が宿り、特に先端が尖（とが）った枝先には神が降りるとして昔は様々な常緑樹が用いられていた。その後身近に有り全縁（葉の縁（ふち）に切れ込みがない）で光沢があって美しい葉を持つサカキが定着した。榊は、別名ホンサカキとも呼ばれるが榊が自生しない比較的寒冷地方では榊の代わりに鋸歯のある（葉の縁（ふち）の切れ込み）ヒサカキ（柃）を代用する場合もあります。

サカキ

[榊]　サカキ科 サカキ属

別名・ホンサカキ｜樹高・4～6m前後｜分布・本州（関東地方）～沖縄｜花期・6～7月｜果期・11～12月｜常緑小高木・互生・全縁｜観察フィールド・山 里 神社 半日陰

神事に使われる、艶のある美しい葉

山地の照葉樹林内に生え、神社によく植えられている。葉は長さ7～10cm、幅2～4cmの長楕円状広披針形。両面とも無毛。側枝の基部の葉腋に径1.5cmほどの花が1～3個生する。花弁ははじめ白色で、時れると透明感がある。のちに帯びる。果実は液果。直径7の球形で、熟すと黒紫色になる先端に鳥の爪のように曲がったつくのが目印。

神事で使われる葉が有名だが、6月ごろ側枝の基部の側の葉腋から1～4個、束状に出る白い小さな花も可憐。

ヒサカキ

[柃]　サカキ科 ヒサカキ属

別名・シャシャキ｜樹高・2～5m｜分布・本州～沖縄｜花期・3～4月｜果期・10～11月｜常緑低木・互生・鋸歯｜観察フィールド・山 里 神社

サカキが少ない東日本では、本種を神事に代用

根元から株立ちし、枝を直線的に伸ばす樹形。葉は長さ3～7cm、幅1.5～3cmの楕円形～側披針形。厚い革質。雌雄異株といわれているが、両性花をつける個体も見つかっており、不完全雌雄異株と推測されている。

歴史散歩（ひはるみなみ）　「しんごん」について

樋春南では、老婆と小学生が集まって、「ないだー、ないだー」と唱えながら数珠を回す御真言（ごしんごん）という疫病除けの行事を毎月一回行ってきた。
近年では、場所は地区の集会所に固定し、回数も二ヶ月に一回になりましたが、方法は昔と同じである。（現在では、年に二回になりました。）また、いつのことかは不明であるがある年に御真言をしなかったところ、疫病が大流行したため、以後この行事を行わなかった年はない。

この行事の起源については、昔この地で疫病が流行した時に、始められたものとの言い伝えがある。御真言が始まった時期は定かではないが、天保年間（1830年～1843年）に「コロリ」が流行った時ではないかといわれ、その時には、「コロリ」が入ってこないようにと村境に注連縄（しめなわ）を張り（今でも、毎年1月の塞祭の時にはそこに御神酒を入れた藁竹細工と久那斗神（くなとのかみ）のお札を立てる）御真言をしたという。

御真言の道具は、鉦（陰刻銘「武州大里郡新原庄御正郷御正領／春ノ原村薬師堂」）、数珠、数え板、仏画の掛軸二幅の四種で、現在これらの道具は集会所に保管されている。

御真言のやり方としては、**数珠の輪の中に一人が入り、その人が鉦を叩く役になる。その回りを他の人が円になって座り、数珠を繰りながら「ふーどう、しゃーかむうにい、もんじゅー、ふーげん……」と、十三仏の名を唱える。**

数珠の中には一か所だけ直径五センチメートルの大きな珠が付いているところがあり、それが自分の所に回ってきた時、体に具合の悪いところがあればその珠で悪い所をなでればよくなるという。数珠を回し終わると、「ゴーイシ」といって下（土間側）と上（座敷側）の二手に分かれて数珠の引き合いをする。
昔は、御真言の時には子供たちがよく集まったので、「ゴーイシ」の時には子供たちが下、老人が上を受け持ったが、現在は集まる子供の数もわずかになってきたため、そこにいる人が適当に下と上に分かれている。「ゴーイシ」という言葉の意味は不明だが、数珠を引っ張る時のかけ声で、一同は「ゴーイシ、ゴーイシ」と言いながら数珠を引き合う。この引き合いは、三回行われ、三回目には必ず下（子供たち）が勝つことになっているが、それは家の中の悪いものを外に追い払うという意味があるのではないかといわれている。したがって、「ゴーイシ」を行うには、土間がなければならないが、最近辺家はどこでも玄関付きの家になって土間がなくなり、「ゴーイシ」ができなくなったので、集会所の建設を機に、御真言は集会所でするようになった。

※十三仏（じゅうさんぶつ）＝初七日から三十三回忌までの合わせて十三回の追善供養を司る守護仏です。
故人は、十三の菩薩様や仏様に守られて、極楽浄土に導かれ成仏するといわれています。

不動明王尊（ふどうみょうおうそん）	釈迦如来（しゃかにょらい）	文殊菩薩（もんじゅぼさつ）	普賢菩薩（ふげんぼさつ）	地蔵菩薩（じぞうぼさつ）	弥勒菩薩（みろくぼさつ）	薬師如来（やくしにょらい）
観世音菩薩（かんぜおんぼさつ）	勢至菩薩（せいしぼさつ）	阿弥陀如来（あみだにょらい）	阿閦如来（あしゅくにょらい）	大日如来（だいにちにょらい）	虚空蔵如来（こくぞうにょらい）	

平成２７年１０月１日

樋春南自治会会員　各位

（配布書類にも同じものが入っています。）

樋春南自治会長

自治会便り（１０月号）

１０月２１日は、薬師堂の縁日です。その歴史を紐解いてみると・・・

樋春は、元来は樋口村と称する一村であったが、万治３年（1660 年）に分村して樋口村と春野原村の二村になった。樋春北はかつての樋口村、樋春南はかつての春野原村にあたる。『風土記稿』春野原村の項を見ると、村内の社寺として、春日社・稲荷社・通殿社・真光寺・薬師堂の五つが挙げられている。これらのうち、春日社は、樋口村の七社明神社を指すもので、稲荷社・通殿社も「真光寺持」と注釈があるところをみると、樋口村の通殿稲荷社を指すものと思われる。したがって、春野原村（現・樋春南）の地内にあるものは、「真光寺」と「薬師堂」だけでいずれも現存している。

薬師堂の縁日

樋春南の薬師堂は、「穴薬師」の通称で近在に知られている。この薬師堂には、昔から御本尊がないが、それは不思議なことに御本尊を堂内に安置しておくと、いつの間にか地中に沈んでしまい、これを掘り出してもまたいつの間にか地中に沈んでしまうということを何度も繰り返したあげく、今は地中の深いところに入ってしまっているためであるという。

穴薬師（左手前）と薬師堂

「穴薬師」には、目の悪い人が願をかけ、治ったお礼に穴の開いた石を奉納する習いがある。穴の薬師と呼ばれる石像（右写真）には、寛政９年（1797 年）巳年５月の銘があり、その前の奉納石灯籠には、享保５年（1720 年）１１月１２日村中と刻まれている。穴薬師に掲げられた絵馬には、昭和２８年１０月新築とある。薬師堂では、明治から大正にかけて薬師講が行われていたが、薬師講は大正の初めになくなってしまった。奉納された穴開き石は、現在でも１００個以上はある。

また、薬師堂の内部には、かつては聖徳太子立像が安置されていたが、これも終戦後いつの間にかなくなってしまった。また、昭和４３～４４年ごろまでは堂の側に庫裏があって留守居が住んでいた。**樋春南の薬師堂の縁日は、「薬師様」といわれ、毎年１０月２１日に行われる。**昭和３０年代頃までは、熊谷の成田座に頼んで田舎芝居を余興に行ったものであった。また、昭和５５～５６年ごろからは、８月には薬師堂の境内を使って盆踊りが行われるようになった。

薬師堂の縁日は、元来は樋春南の区長や役員らが中心となって行ってきたが、**昭和４０年代後半に篤志家が新たに薬師如来像を奉納したことを機に、真光寺の住職を頼んで法要を営むようになった。**ちなみに、この薬師如来像は、盗難を避けるため、普段は真光寺に預けてあり、法要の時には住職がこれを持参している。

縁日の日には、堂には紫の大きな幕を張り、境内には灯籠をつるす。灯籠の絵は、昔は地元に絵の上手な人がいたので、その人に描いてもらっていたが、最近は文字を書き入れるだけである。灯龍の枠も、昔は２０基ほどあったが、いつの間にか数基だけになってしまった。昭和４０年代後半に当時の若衆頭が奉納した大きな提灯があり、これを当日出して点灯する。法要が終わっても、この日は参詣者が全くなくなるまで、堂を開けておき、適宜線香や賽銭を上げてもらっている。また、参詣者には茶などを出して接待している。（参考資料：江南町史）